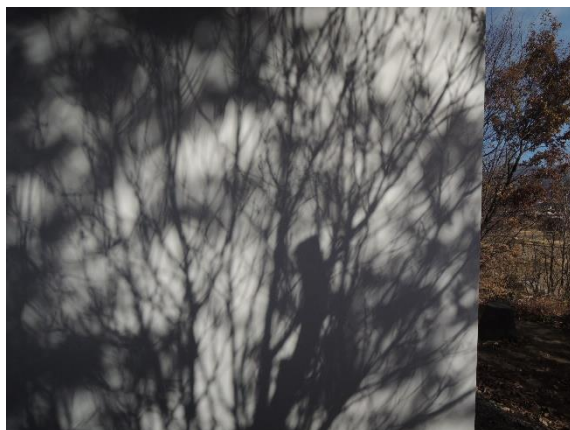


クリスマスと系図

牧師 山本 護

クリスマスはもう間近。マタイ福音書の降誕記述はこう書き出されます。「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった(マタイ 1:18)」。

この降誕記述の前には、養父ヨセフに流れ込む系図が長々と書かれていて(1:1~17)、ダビデの家筋であることが分かります(1:6)。母マリアの系図はありませんが、洗礼者ヨ



ハネの母エリサベトが親類で(ルカ 1:36)、モーセの兄アロン家に属するので(1:5)、いっそう古い祭司の家筋なのでしょう。ところが、系図を延々と記した直後に、あたかもその系を断ち切るかのように「聖霊によって身ごもった」と述べているのは、家柄に拘泥する世の支配者や民衆への一撃なのでしょう。

ルカ福音書にもイエスの系図があり(ルカ 3:23~38)、こちらは祖先へ遡る形式で記されています。マタイ福音書の系図がメソポタミア由来(創世 11:31)のアブラハムから始まるのに対し(マタイ 1:2)、ルカ福音書のそれはアブラハムを遥かに超えて、神話的なノアやアダムまで遡ります(ルカ 3:36~38)。両者の系図は共に史実ではありませんが、そもそもクリスマスは「聖霊によって身ごもった」出来事ですから、系図の信憑性は問題外でしょう。

系図は英語で「family tree」。なるほど、私から父と母へ、四人の祖父と祖母へ、八人の曾祖父と曾祖母へと遡行し続けると、大きな樹冠のような図が描ける。逆に、歴史の流れに沿って祖先から現在の私に至る嫡流と傍流を描いても「family tree」になります。前者の私の位置はその幹にあたり、後者だと私は枝先に位置づけられます。

「はっきり言うておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。肉から生まれた者は肉である。霊から生まれた者は霊である(ヨハネ 3:5~6)」。降誕した神の御子と同じように、私たちにとっても新たに「霊から生まれる」ことが何よりも大事で、「family tree」はさして意味がありません。

冬ざれた午後、礼拝堂の白壁に映った陰影にハッとさせられ、ちゃんと読んだことのない福音書の「family tree」を確かめました。彼らの粘着的な系図に比べて、私の祖先はわずかに高祖父までしか辿れず、その先は無明です。しかし20万年前アフリカのアダムまで遡れば、私たちは天の霊においてだけでなく、地の肉としても兄弟姉妹なのだと思います。くすり苦笑してしまいました。Ω